



医療活動(イメージ)

▲料金等・詳細・お申込みはこちら

病院で医療体験&世界を舞台に活躍する医師・看護師との交流

カンボジアにおける臨床医療の現場を知る5日間 ミャンマーにおける臨床医療の現場を知る6日間

当コースは当初面からのお申し込みは承っておりません。
詳しくはQRコードよりホームページをご覧ください。



高校生 大学生 相部屋 看護・助産・医療 教育
交流 文化体験 ボランティア 国際協力

MANABI POINT

経済発展が著しいカンボジアとミャンマーとでは、内戦や貧富の差の拡大に伴って人々が人間らしい生活を送るうえで必要不可欠な医療分野に大きな課題が残されています。ツアーではジャパンハートの活動地を訪問し、医療現場の視察や医療活動をするほか、現地で活動しているスタッフや医師・看護師を目指す現地の医学生、患者さんと交流します。世界の医療の現状をしり、医療が届かない場所で失われてゆく「いのち」を1つでも多くつなぎとめる一歩を踏み出しませんか。



特定非営利活動法人ジャパンハートとは

ジャパンハートの活動の目的は『医療の届かないところに医療を届けること』。

主な活動は3つあります。

1つ目は、途上国での貧困や医師不足で医療を受けられない人々へ無償で医療を届けることです。主な活動地はミャンマーとカンボジアとラオスで、現在年間約2千件の手術を行い、1万2千人の患者さんの診療を行っています。またカンボジアやラオスでは、現地医療者育成支援活動や応急処置の指導等の保健活動も行っていきます。

2つ目は、医療者不足が深刻な僻地・離島に継続的に看護師を継続的に派遣することです。日本の僻地・離島医療の医療者不足の現状は、都会に比べて厳しいものがあります。しかし、僻地には、しっかりと土地に根ざした地域医療を行っている病院や診療所が多く、そこで研修を行ったスタッフたちの多くは、濃厚な人的つながりに基礎を置く地域医療を経験でき、有意義な時間を送っています。

3つ目は、小児がんの子ども達とその家族に対して、医療者を派遣し旅行をサポートする事で思い出作りを支援することです。疾患のために移動に不安のある子どもや家族に対し、ジャパンハートの医師・看護師が旅行や思い出作りに同行しサポートを実施しています。その他にも、災害時の緊急医療支援(フィリピンでの台風30号etc.)、東日本大震災復興支援事業、ミャンマーではHIVで親を亡くした子ども、虐待されている子どもの保護を目的とした養育施設の運営を行うなど医療活動を中心に幅広く活動しています。

現地の病院での医療活動の体験

手術見学のほか、傷の処置、英語でのカルテ記入などを体験します。患者さんや現地で活動する日本人看護師と交流・活動します。実際に国際医療体験をすることで、日本と発展途上国の医療の現状や違いを感じ、医療の必要性について深く考えさせられます。※一部のプログラムは看護師・助産師限定ツアーのみのプログラムとなります。



患者との交流(イメージ)



現地医学生との交流(イメージ)

現地駐在日本人医師・看護師との座談会

現地での生活や活動中の失敗や喜び、新たな発見や出会い、現地の医療・保険制度についてなど、リアルな声を聞けます。現地の方や同じ志を持つ参加者との出会いと交流は、ボランティア活動以上に自分達のこれからの生き方に影響を与えることになるかもしれません。

現地で暮らす人の「いま」を知る

ミャンマーにはHIV孤児や貧困問題に伴う人身売買から子供を守る養育施設があります。カンボジアではゴミを拾って売ることでも生計を立てているトラッシュピッカーが暮らす村があります。これらを訪れることでミャンマーとカンボジアそれぞれの社会問題を目の当たりにします。医療以外で私達に出来ることは何か、考えることは尽きません。※一部のツアーではこちらのプログラムは含まれておりません。



トラッシュピッカー訪問(イメージ)

こんな人におすすめ!!

「自分の経験が海外で役立つのか試したい」「途上国でどんなスキルが必要なのか知りたい」「病気の子どもたちのために役立つことをしたい」「将来医療に携わりたい」…そんな思いを持つ看護師・助産師・大学生・高校生それぞれにぴったり合ったプログラムを展開しています!出発日や料金、よくある質問などは特集ページをご確認ください。



子供と交流(イメージ)

旅の見どころ | 内戦を超えて未来の医療を担う



手術見学(イメージ)

世界遺産のアンコールワットで有名なカンボジア。近年、首都のプノンペンを中心に急速に経済発展をしている一方で、国民の60%を占める農村部との生活格差の拡大が課題となっています。また、およそ20年に及ぶポルポト政権中に知識人が大量虐殺されたことで、当時残った医者はたった40人ほど。その爪痕は内戦から40年経った今も、医療保険制度の未整備や知識・技術の遅れ、医療従事者不足という形で残っています。

ツアーではキリングフィールドやトゥールスレン博物館など、その「国」をより深く理解するために、現地の歴史・文化についても学びます。さらに、これからのカンボジアの医療を担う医師・看護師を目指す現地の若者たちとも交流します。



出産に立ち会う(イメージ)



シーツ洗濯(イメージ)



入院患者と交流(イメージ)



ドリームトレインにて(イメージ)

旅の見どころ | ジャパンハートはじまりの地



子供と交流(イメージ)

国民の90%が敬虔な仏教徒で親日でもあるミャンマーでは、水道や電気といった生活インフラだけでなく国民皆保険制度といった部分も未整備で、貧しい人は病氣・ケガになっても満足な治療が受けられず、村の伝統医療に頼らざるを得ない状況があります。さらに国境付近では今でも人身売買が大きな社会問題となっています。それには、貧困・HIV孤児など様々な問題が絡み合っています。子どもたちは家族のために想い自ら「売られる」こともあるそうです。学校へ通えず、その結果職につかず、貧困が連鎖する現状があります。

ジャパンハートの活動先だけでなく、養育施設を訪ねることで医療以外で私たちに出来ることは何か、考えることはつきません。



入院患者と交流(イメージ)



入院患者と交流(イメージ)



入院患者と交流(イメージ)

5days Schedule

カンボジア

Day 1	成田発 → (乗継) プノンペンへ	[プノンペン泊]
	プノンペン観光 プノンペン 郊外のウドンへ	
Day 2	ジャパンハート医療センターでオリエンテーション&医療体験・見学	[ウドン泊]
	長期活動医師・看護師との交流	
Day 3	ジャパンハート病院での見学&医療体験&患者との交流	[ウドン泊]
	村の訪問、農村部での生活環境を知る	
Day 4	ゴミ山・周辺スラム街訪問で貧困問題を知る	[機中泊]
	王宮観光&プノンペン市内でショッピング	
	プノンペン発 → (乗継) 成田へ	
Day 5	成田着	

- 日本発着時利用航空会社：全日空、ベトナム航空
- 最大旅行日数：減延泊不可
- 利用ホテル：[プノンペン]カルダモンホテル又は同等スタンダードクラスホテル [ウドン]ジャパンハートゲストハウス
- 食事：朝3、昼3、夕4(機内食は除く)
- 最少催行人数：8名(定員：14名)
- 添乗員：なし(現地ジャパンハート日本人スタッフ同行)

参加者の声「ひとの心に触れる旅」

ツアーの前半は、この国の歴史を知るために博物館などを巡ります。多くの犠牲者の顔写真を見て、ひとりひとりの悲しみや恐怖、怒りや悔しさが伝わってくるようでした。もし時代や場所を越えて、自分がそこにいたらどう考え行動するだろうか、と問われているようにさえ感じました。後半は、現地の病院を訪ねます。言葉が通じなくても笑顔を返してくれる患者さんばかりで、現地でこの病院が地域と築いてきた信頼関係を感じました。現地スタッフにお話を伺う機会もあり、ここで働こうと思った理由や、苦勞のなかで見出した答え、その先にある喜び、など教えて頂くことができました。この旅を通して、働く意味やお金の価値、時間の大切さ、医療者としての初心や原点、など考えさせられました。

(助産師ツアー参加者 T様・2018/09参加)



6days Schedule

ミャンマー

Day 1	成田発 → (乗継) ヤンゴンへ	[ヤンゴン泊]
	HIV孤児や人身売買から子ども達を守るための養育施設	
Day 2	ドリームトレインにてポランテア活動	[サガイン泊]
	ヤンゴン → マンダレー → サガインへ	
Day 3	ワチェ慈善病院訪問&医療体験・見学	[サガイン泊]
	長期活動医師・看護師との交流	
Day 4	ワチェ慈善病院にて医療体験・長期活動看護師との座談会	[マンダレー泊]
	マンダレー市内観光	
Day 5	マンダレー → ヤンゴンへ	[機中泊]
	ヤンゴン市内観光&ショッピング	
	ヤンゴン発 → (乗継) 成田へ	
Day 6	成田着	

- 日本発着時利用航空会社：全日空、ベトナム航空
- 最大旅行日数：減延泊不可
- 利用ホテル：[ヤンゴン]パノラマホテル又は同等スタンダードクラスホテル [サガイン]ゴールデンワールド又は同等スタンダードクラスホテル [マンダレー]ホテルマンダレー又は同等スタンダードクラスホテル
- 食事：朝4、昼4、夕3(機内食は除く)
- 最少催行人数：8名(定員：14名)
- 添乗員：なし(現地ジャパンハート日本人スタッフ同行)

参加者の声「家族で談笑し支え合う。ミャンマー人たちのあたたかさを見た」

病院の施設を見学し、手縫いガーゼの作成を体験することで、限られた資源の中で懸命に活動を行っていることを知り、日本の病院がいかに恵まれた環境にあるのかがよく分かりました。不十分な医療設備や度重なる停電の中、病院が運営できているのはスタッフの方々の献身的な働きやチームワークを支えられているところが大きいと思いました。現地の環境で患者さんのためにできる限りベストなことをしようという思いが伝わってきました。参加する前は、限りなく悲惨でどうしようもない貧困層の患者さんを対象にして活動しているのではないかと感じていました。実際に入院患者さんを見る中で、そのような悲壮感をあまり感じることはなく、家族で談笑したり支えあったりしている姿からはミャンマーの人たちの暖かさを垣間見たように思います。(大学生 Y様・2015/09参加)

